

第1回

「問い」をもたせる場面でひと工夫

1. 事実とのインパクトのある出会いを演出する

アクティブ・ラーニングが目指すのは、課題の発見・解決に向けた主体的・対話的で深い学びです。グローバル化と情報化による変化の激しい予測困難な時代を豊かに生き抜いていくために、今ほど「問題解決的な学習の充実」が求められる時はありません。

だからこそ、社会科の授業では、「子どもたち一人ひとりが社会的事象に対して問いをもち、ねばり強く調べたり考えたりすることを通して、また問いをもつ…」、このような授業を目指していきたいですね。

子どもたちが、主体的にこのような社会科の授業をつくりあげていくためには、子ども一人ひとりが、社会的事象に対して問いをもつということが必要不可欠です。なぜなら、問いをもつということによって、教師の教えたことが、子どもの学びたいことに転化するからです。そのためには、「えっそんなに?」「おかしいよ!」「ひどい!」などという声が出き出るような「事実とのインパクトのある出会いを演出する」というひと工夫が必要となります。

そこで今回は、三つの具体的な事例に沿って、「事実とのインパクトのある出会いを演出する」ためのポイントについて考えていきたいと思います。



買い物調べ		4部3年	2016.9.5(月)~9.11(日)
スーパー			1244
百貨			24
イトーヨーカ堂			74
コンビニ			62
せんりょう			223
デパート			21
その他			149
その他			14

【資料2】
買い物調べ
の集計結果

う結果を提示します。とたん「えっそんなに?」と、子どもたちから驚きの声があがりました。すかさず『なんで“えっ”なの?』と突っ込む。すると、「だって、たしかにスーパーが多いとは思っていたけど…」「そうそう。でも、いくらなんでもこんなに多いなんて…」「本当かなあ…」という子どもたちのつぶやきの声が広がっていきます。

そこで、集計した「正の字」を提示します。子どもたちは再び「えっー!」と驚きの声をあげます。子どもたちは、各自で自分の家が1週間に買い物した品数を「正の字」を使って集計しているのです。その数の多さに圧倒されるのです。「スーパーではたくさんの品物を買っている」という言葉だけのものを、具体的に感じたり、目に見えるようにしたりする演出が大切です。

「でも、なぜ、みんなスーパーでこんなに多くの買い物をするのだろう…」「家から決して近いわけじゃないのに…」『つけたしはありますか』と問いかけ、子どもたちの驚きや疑問の声を増幅させていきます。「たしかに。安いだけじゃないよね…」「なぜ、スーパーでこんなに買い物をするのだろう…」このようなやりとりを通して、「なぜ、スーパーで買い物をすることが多いのか?」という問いをもたせることができました。

業間（授業と授業の間）の子どもたちの追究ぶりは素晴らしいものでした。家の近くのスーパーに見学に行ってきた子、チラシを集めてきた子、親にインタビューしてきた子…。そこから、「品ぞろえ」「値段」「新鮮さ」「便利さ」などが、その理由なのではないかということになりました。そして、自らの問いを解決するために、駅前のスーパーにクラス全員で見学に行くことになりました。



【資料 3】 2011 年 3 月 13 日，釜石市内で避難する親子／提供 朝日新聞社

3. 「おかしいよ！」これまでの経験をくつがえす事実との出会い

—5 年「自然災害とともに生きる」—

東日本大震災という未曾有の自然災害により防災の意識は大きく変化しました。「想定外」とされる津波の威力は，世界最大の水深を誇り，釜石の「安心の砦」となっていた釜石湾口防波堤も破壊しました。

子どもたちは，日本の国土で起こるさまざまな自然災害の発生の仕方について調べた（『小学社会 5 下』 p.41）後，この釜石にある世界最大水深の防波堤が破壊された事実を，教師が提示した映像資料で知ることとなりました。国（公助）が総工費 1200 億円と 30 年の年月をかけてつくった防波堤は津波によって壊されてしまったのです。

津波は釜石の市街地に流れ込み，168ha が水浸しになり，釜石市内では 1040 人の死者・行方不明者が出たことを伝えた後，1 枚の写真を提示しました。震災直後の 3 月 13 日に釜石の市街地で撮影された家族の写真【資料 3】（朝日新聞出版『報道写真全記録 2011.3.11-4.11 東日本大震災』所収）です。そして『今，ここに立っている家族はどんな気持ちだと思いますか？』と発問しました。

「知り合いが亡くなった。悲しい…」 「亡くなった人を帰して欲しい！」 「たくさんの人の命を奪った津波が憎い！」 「想定外だった…」 「なぜこのようなことになったんだ。“世界一”の防波堤，“安心の砦”だったのに…」。

『たしかに釜石の“安心の砦”は壊されてしまったけど，このままではいけないよね。

実は、防波堤の再建工事が翌年の2月26日からさっそく開始されました。2018年3月までに完成させる予定です。どのような防波堤が完成すると思いますか?』とさらに問う。

「津波を防げる防波堤!」「前より高い防波堤!」などと矢継ぎ早につぶやいていく子どもたち。そこで次のような意外な事実(日本経済新聞2012年3月2日の釜石湾口防波堤再建の記事)を提示する。

『再建される防波堤は、以前の防波堤と同じ高さなんだって』。

すると、間髪入れず、「おかしい!」「なっとくできない!」「釜石の人たちは、なっとくしたの?」「どうして前と同じ高さなのかかわからない!」「前と同じだったら防ぎようがないよ!」と教室中で異議を唱える声があがりました。このような流れの中で、「なぜ再建される防波堤は、前と同じ高さなのか?」という問いをもたせることができました。

どんなに計画的に防波堤などの施設を充実させても、自然災害を防ぐことは不可能です。釜石の「安心の砦」は確かに破壊されました。しかし、津波の高さを6m抑え、その到着を6分遅らせることはできていました。その結果、1300人が避難所までたどり着けたと推計されています。

たとえ防波堤というハード面(公助)では防げなくても、「想定外」を前提とした避難計画を一人ひとりがつくり、日頃から避難通路を確認し、避難訓練を怠らないといったソフト面(自助・共助)で補完していくことにより自然災害を減らすこと(減災)はできるのです。

「再建される防波堤は、前と同じ高さ」という、これまでの経験に裏打ちされた予想がくつがえされる事実と出会うことによって、「協力して自然災害を防ぐ」(『小学社会5下』p.46)という多重防災の必要性を、より実感的に理解していく姿が見られました。

4. 「ひどい!」怒りなどの心情に訴える事実との出会い

—6年「世界の人々とともに生きる」—

読売広告大賞第31回(2014年度)のグランプリ受賞作品に、子どもが5人描かれ、その頭上に「もんだい 子どもは何人?」、足元に「せいはい4人」と書かれた広告作品があります。この作品は、国際協力NGO「ワールド・ビジョン・ジャパン」によって、貧困等の劣悪な環境におかれた子どもたちへの支援を呼びかける目的で制作されたもので、ウェブ上でも見ることができます。

この作品を子どもたちの前に提示して、『子どもは何人?』と問いかけます(「せいはい4人」の部分は隠しておきます)。

子どもたちは「5人」と答えます。そこで5秒数え、再度『子どもは何人?』と問います。どう見ても5人であるが…、『正解は、4人。今、世界で5秒に一人の子どもが亡くなっている』からです。

子どもたちは、「えっ—!」「ひどい!」と驚きや怒りの声をあげました。そして、その理不尽さや死亡原因の予想について語り始めたのです。



【資料4】水を飲む男の子(エチオピアにて)／提供 アフロ

そこで、男の子が泥水を飲んでいる写真資料【資料4】を提示します。ただし、何を飲んでいるかが分からないように泥水の部分を隠しているのです。子どもたちは自然に何を飲んでいるかについて予想し始めます。教科書（『小学社会6下』p.66）には食料の配給に並ぶ子どもたちの写真資料や様々な資料が掲載されているので、予想しやすいはずですが。予想を出し合ったところで、隠している部分をとると、さらに驚きや困惑した表情を見せます。

「こんな泥水を飲んでいたら病気になって死んでしまう…」。今、世界では3人に一人が水不足に苦しみ、8人に一人が安全な水を使うことができない環境下におかれています。

さらに、小学校高学年くらいの少年二人が並んでいる写真【資料5】を提示します。彼ら何をしているのかは、手の辺りを中心にマスクで隠されているため分かりません。ただ、二人ともかなり真剣な顔をしており、二人の後方には何か焼けた跡が見えます。予想が一段落したところで、マスク部分はずします。

「…」。子どもたちは絶句しました。二人とも銃を持っているからです。戦争に巻き込ま



【資料5】戦闘に参加する少年たち(シリアにて)／提供 アフロ

れ、命を落としたり、家族を失ったりする子どももあとを絶ちません。

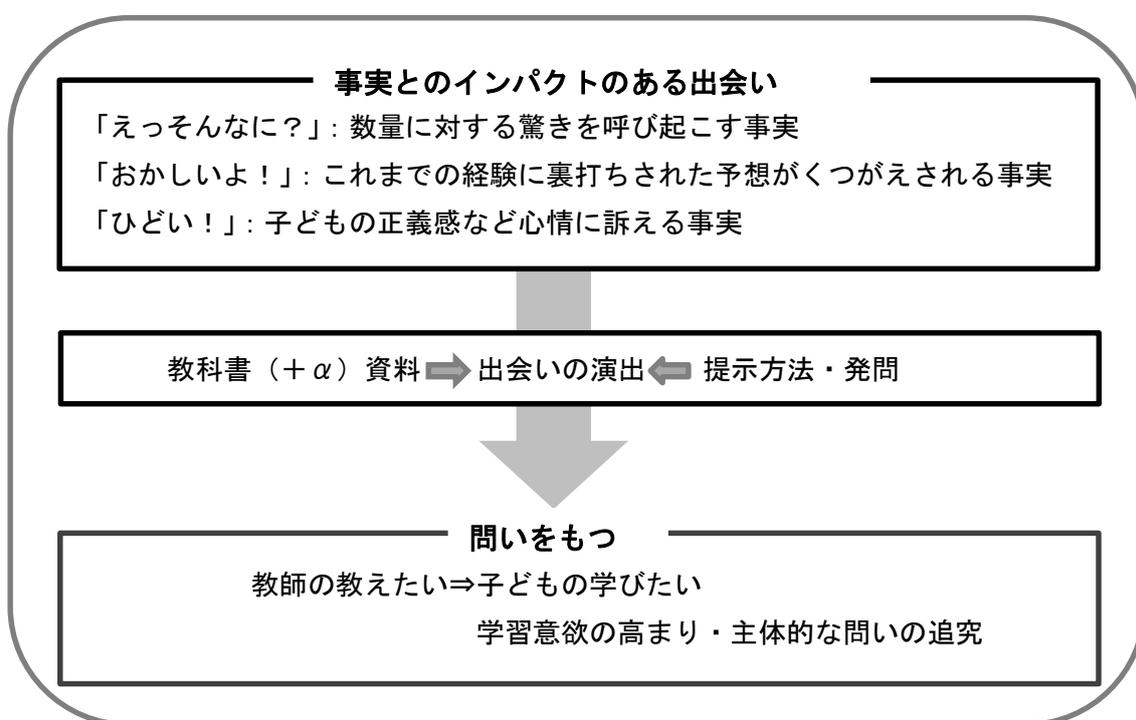
「同じ地球に生まれたのに、自分たちの生活とあまりにも違う！」「何かできないかな。こんなのひどいよ！」「できるわけないよ！」。

ここで子どもたちに発問します。『何もできることはないのだろうか？』と。

すると、(『小学社会 6 下』 p.66~67 等も参考にしながら)「1錠で4~5Lの水をきれいにできる浄化剤104錠が100円で買える！」「ユニセフ募金で私たちも支援できるね！」「国連や NGO, 青年海外協力隊, 他にも様々な活動を行っているよ！」「何もできないということはないんだね！」…。

このような声を受け、「世界の子どもたちの命を守るために、どのようなことができるのか？」という問いをもつことができました。そして、この問いをもとにして「ユニセフのはたらき」(『小学社会 6 下』 p.66)について、これまでの募金活動の経験と結びつけながらより実感的に理解していく姿を見ることができました。小学校卒業を目前に控え、「だれもが生き生きと暮らすことのできる社会の実現」に向けて主体的に考えていく姿と言えるのではないのでしょうか。

以上、三つの具体的な事例をもとに、「事実とのインパクトのある出会い」を具現化するためのポイントについて述べてきました。まとめると以下の図のようになります。



次回のテーマは、「学習問題づくりの場面でのひと工夫」です。子ども一人ひとりの問いを、全体の学習問題につなげていくための指導上のひと工夫について、考えていきたいと思えます。